

# 市民歌舞伎第 38 回公演 「初春巴港賑」を観劇して

2月14日（日）午後1時から函館市民会館で市民歌舞伎「第38回公演・初春巴港賑（はつはるともえのにぎわい）」を初めて観劇しました。

2月1日に遺愛の卒業生である大谷（旧姓・船橋）千春さんが、ご主人の歌舞伎俳優・大谷桂三さんと一緒に訪ねてこられ、桂三さん自らが今回の市民歌舞伎の監修を務めたので、後輩の遺愛生にもぜひ見ていただきたいと宣伝していかれました。私は函館の市民歌舞伎が毎年公演されているのは知っていましたが、一度も行ったことがありませんでしたので、これを機会に観劇してみようと市民会館に足を運びました。市民会館の駐車場には15分前に到着したのですが、駐車場は車がいっぱい駐車するのにやや待たなければなりません。車を何とか駐車し、会場に入ってみるとほぼ満席、あいている席を探すのが大変で、函館市民の関心の高さが伺えました。

予定通りに開演、一番目の演し物は「口上」でした。6人の方々が述べたのですが、どの方も一生懸命練習してきたのか、堂々としていて、そして笑いもとりながら演じていました。次は「白波五人男」河竹黙阿弥の代表作の一つで五人の盗賊を描いた作品でした。3番目は「寿春巴初舞（ことほぐはるともえのまいぞめ）」で、遺愛の卒業生が多数出演し、華麗な舞を披露していましたし、現役の遺愛生も頑張っていました。

最後は「勸進帳」（安宅新関の場）でした。披露するにあたっては大谷桂三さんが、十一代目市川海老蔵のところへお伺いををたて、公演の許可を得て今回の監修となったそうです。桂三さんの指導もあって、皆さん大熱演でした。特に武蔵坊弁慶の迫力は圧巻でした。歌舞伎初心者の私も、とても楽しんで観劇できました。

国際交流基金に勤めていて、現在ニューヨーク在住の大学時代の友人が、「一度、歌舞伎を生で見ても、面白いぞ！」とずいぶん昔に言っていた言葉が甦りました。2016年2月18日（木）



福島校長（左）を訪れ「初春巴港賑」を  
宣伝した大谷さん（右は千春さん）

大谷桂三さんと千春さんが遺愛を訪問  
（函館新聞2月2日号より）